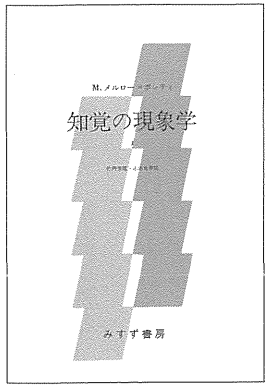
本棚の古典の散歩道



『知覚の現象学 1』
モーリス・メルロー＝ポンティ著
竹内芳郎・小木貞孝 訳
（みすず書房　1967 年）

子どもの世界への通路

評者 田代和美
（大学教員）

哲学の素地もない私がメルロー＝ポンティの本を紹介するなどおこがましいという声が聞こえる。それでも子どもや保育のことを考える上で彼の考えを少しでも共有してもらえればと思い直す。

「言葉は、言葉を語る者にとって、すでにでき上っている思想を翻訳するものではなく、それを完成するものだ。[注1]」この言葉を支えにして、あてどなくこの散歩道を歩き始めたい。

それまで居心地の悪さを感じつつも、とりあえずは心理学の世界の隅っこに身を置いていた私が、二十五年以上前に大学の教員として教えることになったのは保育学だった。保育の保の字もわからず、一から勉強しなくてはならなかった。障碍を持つ子どもとの臨床を一つの理論に即して行えずに、臨床の世界でも居心地の悪さを感じていた私にとって、保育は私の捉える臨床がその中に収まる世界であり、日常生活の場に出られた開放感を覚

田代和美（たしろかずみ）
大妻女子大学家政学部児童学科教授。子どもと共に生きる保育者の大事な働きを言葉にすることを目指しています。

えた。しかし、保育という日常生活の場での子どもと大人のかかわりをどのように研究したらよいのかがまったくわからず、大海に投げ出されたようだった。溺れそうになりながらもがいていた中で鷲田清一著『「聴く」ことの力』（阪急コミュニケーションズ　一九九九年）に出会い、ここに何かがあると直感した。そしてその後読んだ引用文献の一つがメルロー＝ポンティの『知覚の現象学』だった。

『知覚の現象学』は大学院のゼミで輪読したのだが、自分が読んだことのない分野の本をどうやって学生と読んだのかを思い出せない。でも、難解な言葉を理解できたとは言えないものの、自分に即して考えると妙に納得できたり了解できる不思議な体験だったことは記憶している。大学院生に力があったからこそ非力な教員の無謀な試みが可能だったのだろう。「客観的世界の手前にある生きられた世界にまでたち戻る」[注2]メルロー＝ポンティの著作に惹（ひ）かれるのは、これまで言葉の力が足りない私でも小さい人たちとは通じ合える触感を持って過ごしてきたから、そして私にとって魅力的な保育者は、子どもを上手に導く人ではなく、子どもと深いところで通じ合っている人だからだろうか。

『知覚の現象学』に描き出されている世界は、「幼児の対人関係」（M・メルロー＝ポンティ『眼と精神』に所収）と関連させることでイメージしやすくなるので、ここでは二つの著作を織り交ぜながら、子どもや保育に通じるメルロー＝ポンティの考えの一部を紹介したい。

メルロー＝ポンティが捉える世界

メルロー＝ポンティは、世界を対象として捉えずに、対話の相手として捉える。『知覚の現象学』では「私が世界をふくむ〔了解する〕」のは、私にとって近いものと遠いもの、前景と背景とがあるからであり、こうして世界が絵となって私のまえでひとつの意味をもってくるからであり、つまり最後に、私が世

界のなかに状況づけられ、世界が私をふくむからなのである。[注3]」と述べる。

奥行きというのは、本来は目に見えないはずのものである。近くや遠くというのは、私の身体がここにあることによって、近くだったり遠かったりするのである。そしてここにある私の身体は、その近くや遠くに見える世界の中の一部の見えるものである。私がここにいる身体として見ることによって世界は存在し、そして私の身体はその見える世界の一部なのである。世界と私の身体との、相手があることで存在し合える共存関係。これが世界との、そして他者との関係なのである。

また「世界とはわれわれの経験の領野であり、われわれとは世界についての或る視方以外の何ものでもないとしたとき[注4]」、「普遍性と世界とは、個別性と主観の深部に見いだされるものだ[注5]」ということが「はじめて理解できるようになる[注6]」とも述べる。

「幼児の対人関係」は、ワロンやラカンなどの知見を踏まえた児童心理学に関する講義録である。題名の通り、幼児の他者との関係が主であり、世界との関係についてはほとんど記述がないのだが、「知覚の最初の状態においては、自分が一つのパースペクティヴの中に閉じこめられていて、それを通してその向う側にある〈一個の物〉を判じているのだという意識はないのであり、むしろ自分は〈個性的―普遍的視覚〉を通して直接に物と交わっているのだという意識があるのです。[注7]」と述べている個所がある。ここでいう幼児の知覚とは、身体を通して物の本質に到達しようとする相貌的知覚である。これは上記の「個別性と主観の深部」に相当する、世界と人間の共存関係の基盤としての知覚である。

また幼児の鏡像の理解について、幼児にとって身体は「鏡の中にありながら、同時に私がそれを触覚的に感じているこの場所にもあるもの[注8]」で、幼児には「身体の一種の距離を

もった同一性、つまり偏在性[注9]」があると述べる。幼児にとって私の身体はここにもあそこにもいる。そしてこの身体の偏在性が私の意識の下で私にとっての遠くや近くを支えているのである。

他者との関係

『知覚の現象学』では、他者関係について、「意思伝達または所作の了解が獲得されるのは、私の意図と他者の所作とのあいだの相互性、私の所作と他者の行為のなかに読みとり得る意図とのあいだの相互性によってである。すべてはあたかも、他者の意図が私の身体に住まっているかのように、あるいは逆に、私の意図が他者の身体に住まっているかのようにおこる。[注10]」と述べられる。

この点を「幼児の対人関係」で見てみると、人間には生まれた直後から「他人の志向が言わば私の身体を通して働き、また私の志向が他人の身体を通して活動するといった、『前交通』の状態があるに違いありません。[注11]」と、人間には〈外から見える私の身体〉と〈私の内受容身体〉と〈他人〉との一つの系として身体を通して他者と通じ合う世界が初めから開かれていることが、事例を通して描かれている。また例えば鏡像について「幼児は、おのれの視覚像の中に自分を感ずるように、他人の身体の中にも自分を感じます。[注12]」と、この系が幼児では未分化であることが事例を通して述べられている。しかしまた大人でも鏡に映る自分の像には「不思議にも私が住んでおり、それは私に所属する何ものか[注13]」であり、また写真を踏みつけて歩くことをためらうのは、そこにその人の存在を認めるからであること。また「共感とは、私が他人の表情の中で生き、また他人が私の表情の中で生きているように思う[注14]」ことであるように、他者と系として身体を通して通じ合うことにおいて、私たち大人の身体が子どもとそう隔たっていないことを改めて思い知らされるのである。

子どもの世界への通路

大人の意識の世界の下部にある身体や知覚の世界を探ることは、子どもが生きている世界を探ることに通じ、意識の下部の世界での大人と子どもの共通性に気付かされ、私たちが子どもの世界に通じる通路を探ることへと導いてくれる。子どもは私たちの意識の世界の下部にある感覚的世界の身体を生きていて、言葉以上に私たちのまなざしや身体のあり様を捉えている。保育者として振り返り、考えることも、身体を通して子どもたちに伝わっていくのである。もちろんメルロー＝ポンティ自身は子どもの世界を探ることを目的としたのではなく、これは私の勝手な捉え方である。私にとってメルロー＝ポンティの思想が子どもや保育に通じるのは、相手の声を聴くことを大切にする姿勢である。他者や物との関係を一方向的ではなく、双方向でお互いが影響し合いながら変化していくと捉える姿勢。自分を絶対化せずに外に開かれて対話（ダイアログ）を通じて相手と共存していく姿勢である。

最後に、保育者と一緒に子どものことを話し合う場で心に留めている文章の一部を引用する。

「対話の経験においては、他者と私とのあいだに共通の地盤が構成され、私の考えと他者の考えとがただ一つの同じ織物を織り上げるのだし、私の言葉も相手の言葉も討議の状態によって引き出されるのであって、それらの言葉は、われわれのどちらが創始者だというわけでもない共同作業のうちに組みこまれてゆくのである。[注15]」そして「現在おこなわれている対話においては、私は自分自身から解放されている。つまり、他者の考えはたしかに彼の考えであり、それを考えているのは私ではないのだが、私はそれが生れるやいなやそれを捉え、むしろそれに先駆けてさえいるのだし、同様に、相手の唱える異議が私から、

自分が抱いていることさえ知らなかったような考えを引き出したりもするのである」[注16]。

できれば保育者と一緒に話し合う場での対話が、認識の言葉だけの対話ではなく、身体を含めた対話になるような対話相手でありたい。その場にはいない子どもの声を聴こうとし、子ども自身の経験のプロセスをたどろうとしながら、時空をさかのぼって偏在し、子どもと出会い直すことを共同作業とする対話の相手でありたい。

「身体が己れの意味する〔指示する〕思惟なり意図なりを表出し得るためには、けっきょくのところ身体はみずから思惟や意図になり切らねばならぬ」[注17]。保育者の（：筆者加筆）「身体こそがみずから示し、身体こそがみずから語る」[注18]からである。

注

1 M・メルロー＝ポンティ『知覚の現象学1』竹内芳郎・小木貞孝 訳　みすず書房　一九六七年　p. 293

2 同右　p. 110

3 M・メルロー＝ポンティ『知覚の現象学2』竹内芳郎・木田元・宮本忠雄 訳　みすず書房　一九七四年　p. 303

4・5・6 同右　p. 300

7 M・メルロー＝ポンティ「幼児の対人関係」（M・メルロー＝ポンティ『眼と精神』滝浦静雄・木田元 訳　みすず書房　一九六六年）p. 184

8・9 同右　p. 168

10 前掲1　p. 304

11 前掲7　p. 137

12 同右　p. 159

13 同右　p. 157

14 同右　p. 177

15・16 前掲3　p. 219

17・18 前掲1　p. 323